

DAIDO CAMPUS

DAIDO INSTITUTE OF TECHNOLOGY

2001.5.18 No.36

編集・発行 大同工業大学社会交流センター

〒457-8530 名古屋市南区滝春町10-3

TEL 052-612-6193

No.36



毛利氏 岩間研究室訪問

CONTENTS

特集 毛利さんと懇談会 「宇宙飛行士を目指すには」

創立60周年記念

コンセプト・コンクール

平成13年度入学式

平成12年度学位記授与式

新任教員のみなさん

退任教員からのメッセージ

TOPICS

澤岡学長が科技・学術審の委員に

アンテナ

材料と環境フォーラム講演会

国際学術講演会

澤岡泰子展

ゴビーの散歩道

「授業開発センター」設立紹介問答

INFORMATION

季刊

大同工大キャンパス

春季号 2001

MAY



5



毛利 衛氏



司会 /
水野教授

司会：本学の学生諸君と宇宙少年団のリーダーの方達から、毛利さんへの質問もいろいろあるだろうということでこの会を進めたいと思います。

毛利：宇宙少年団団長の毛利です。宇宙少年団は1985年にできました。ちょうど、私たちが宇宙飛行士に選ばれた年ですね。そのあと、92年に飛行を終えた後、団長を引き受けることになりました。その時に松本零士さんが理事長をされ新しい体制になり、今につながっています。そのほかに、今、日本科学未来館という新しいタイプの科学館が東京のお台場に、今までとは全然違う科学館が出来ます。また、皆さんがその場で活躍できることがあるかと思しますので、よろしくをお願いします。

澤岡：私は日本最長老の宇宙飛行士を目指しています(笑)。お酒を飲み過ぎると体の調子がだんだん言うことをきかなくなり、大きい声では言えなくなってきたような気がします。12月にMU300で10回、無重力体験飛行をしました。62歳は最長老かなと...この大学の学長の澤岡です。今日は女性が多くて驚いた(笑)。

毛利：ひょっとしてこれから大同工業大学のリーダーシップをとっていく人たちが女性ということで...

澤岡：そういう方向で行きたいと思えます。ウチのポリシーです(笑)。

司会：それでは皆さんのほうから自由に質問するという形でいきましょう。

毛利：浅井さんは具体的にどのようなところで宇宙少年団で活動しているんですか。

浅井：入ったのは1年位前で、やって一番良かったと思ったのは、去年の夏のサマーキャンプで岐阜県の荘川村に2泊3日で行きました。工作教室や天体観測を深夜2時頃に

大同工業大学創立60周年記念特別講演会が4月21日(土)名古屋市公会堂で開催される機会に、毛利さんの好意により水野教授の司会のもと、澤岡学長、学生諸君、宇宙少年団名古屋支部リーダーの皆さんとの懇談会が、当日の午前、本館14階同窓会・後援会室で実現しました。その一部を紹介します。

出席者

毛利 衛日本科学未来館館長、澤岡 昭学長、(司会)水野義雄保健体育教室教授
《学生諸君》 01KD田仲 圭さん、01EM新藤雅子さん、01EM水野義樹さん、
01BM浅井晴美さん、99M福井己容さん、99M森千花さん、
00C石原聖子さん
《宇宙少年団》 森田王作支部長、坂井孝弘分団長、太田和秀リーダー、
今井雄一郎リーダー、山本高行リーダー

しましたが、夜中にこんなに空のきれいなところで天体観測をしたことがなかったので、自分も驚き、子どもたちも喜んでいました。

毛利：分団のリーダーは誰ですか。

司会：分団長は私です。

森田：名古屋支部は4つ分団があり、活動は支部一本で、知恵を出し合っています。

日本科学未来館の情報はこちら

太田：未来館ですが、中部地方でも関心が高く、ただ新しい情報がなかなか出てこなかったりで困っているんです。

毛利：これからホームページを少しいじり、ものをつかっていこうと思っています。外に出そうとすると、国の機関なので制約があり、いったん外に出してしまうと取り戻せないということがあって、ホームページは0.1バイト、次は1.0バイト。単独で私が外に勝手に出してしまうと、そういうことはおいおいにやっていこうと思っています。

宇宙に行っても
血圧は高くない

石原：本に書いてあったんですけど、高血圧と心肺機能の心配のある人は飛行に良くない、搭乗できない人と書いてあるんですが。

毛利：宇宙飛行というのは物理的に人間が無重力というところに行って、障害が予想されるのはやはり高血圧。これは地上と違った環境になると今は下のほうに血液が流れるわけでしょう。それが頭のほうに上ってくるから、頭の中の血管がプツンといたら大変なんでね。それで血圧の低い人、高い人はさらに宇宙で高くなる可能性がある。ところが本当に血圧が宇宙に行ったら血圧が高くなるかという実験をしてみると、必ずしもそうじゃない。それは血圧をどうして測るかという、普通は静脈で測るけれど、カテーテルを入れて心臓の近くで測ってみると、必ずしもそうじゃないということが分かったので、本当に高血圧の人が将来的に行けないかということとは違う問題だと思います。

重要なことは精神力

毛利：今は物理的に宇宙に行くことだけを考えていますが、それ以外に「いったい何のために宇宙に行くのか」と考えた場合、お客さんとして行くのか、仕事のために行くのかで大きく分けられて、仕事のために行くのなら無重力下でも、あるいは環境が変わった時でも仕事をできる人じゃないといけない。そういう制約を考えると今、スペースステーションで長期間滞在する宇宙飛行士を選ぶ時に非常に重要なところは精神的なものです。宇宙に行ったらいいけれど、環境が変わってちょっと気が変になってメールのボタンを押してしまったり、すぐ破壊のほうに行ってしまうので、そういう人はできるだけ避ける。目に見えないけれど、非常に精神的な検査を大事にしています。

田仲：そういう精神的なタフさというのは、どうやって審査するのですか。

毛利：精神力が強いというのは、いろんな測り方がありますよね。数値で表すやり方もあります。しかしむしろ、1個の人の力ではなくて、まわりの環境の変化によってどうやって対応していくか。いろんな人が居た時に自分を失わずに、他人に左右されずにきっちり、なおかつ全体の流れの方向、ミッションがあるでしょ。チームとして向かいながら、なおかつ自分を持ち続けるというのは、面接をさせたり、6人のチームを作って例えばマイナス20度のところに連れて行くんですね。誰がリーダーシップを取るとかを知らせずに、最低限の食料と着る物を与えて一週間のカナダの雪原で、行き先だけは決めます。終わった後、一人一人に「自分は5人のうち誰となら一緒に働けるか、誰となら働けないか」をたずねるんです。お互いに評価させて、よい評価の高い人が選ばれるということです。

大事なものは、何か問題が起きた時にリーダーシップをとれることが非常に重要なことで、しかし同時に環境が変わった時に、その分野に一番精通した人がリーダーシップをとるとするのが自然です。その時に、その人に自分は

宇宙飛行士を目指すには

従えるかということも大事で、ある時はリーダーシップをとりある時はフェローシップというんですが、今までのアメリカの宇宙飛行士に選ばれた人はリーダーシップばかりを強調してきたんですね。軍もそうです。しかし、フェローシップも非常に大事だということで、新たに見直されています。そういう精神的な実施に基づく、お互いを選ぶというのが見直されつつあります。それ以前に基本的ないろんなテストあるでしょ。そういうのでスクリーニングしておきます。

回転椅子をぐるぐるさせて精神力の強い人がハイクラス

森田:ミールもそういうやり方ですか?

毛利:いやミールは全然違います。発想自体が違いますが、ロシアの場合は医学の部門で医者たちがすごい力を持っている。かなり実験材料としているんなことをされているみたいですね。関係のないトレーニングまでして、例えば回転椅子のような。NASAではもう回転椅子なんて、あまり関係の無いことがデータのわかっているんで、初めから選抜にも取り入れていないんですけど、ロシアの場合は未だに回転椅子をぐるぐるさせて精神力の強い人がハイクラスだ(笑)そういうところがありますね。

企業は何のために宇宙開発をするか

今村:多分国際宇宙ステーションにも宇宙実験が多くなってくると思うんですが、これからの宇宙開発において、ずーっと研究所レベルでやってはなかなか広がりが持たないのではないかなと思ひ、少し澤岡先生の案と関係するかもしれませんが、企業がどんどん入っていかなくてはいけないと思うんですよ。それで、企業に対してお金を出しなさいと言っても、その結果がすぐにフィードバックされ、利益が出てくるわけでもないんで、そういう企業に対して、宇宙開発にはこういういい面があるとか、興味がない一般の人たちに対して宇宙開発にはこういう意味があるとか、どう説明をすればいいのか、少し考えたことがあります。そのへんのお考えを。

毛利:企業の人々が宇宙実験するということはどういう意味があるのか、なぜ企業の人々が宇宙で実験しようと思うのかということから始めなきゃいけないでしょ。それは何ですかね。企業は何のために宇宙開発をするのでしょうか。

今村:利益を出すため。やはり(笑)。

毛利:「何のためか」ということを明らかにしないと、ただすぐ2年後3年後の利益に還元することを目標にしている企業ならばなかなか入りにくいかもしれないよ。というのは、まだその時期に来ていないので、かなりベンチャー的なところもあるし。今までの経験では2年3年では

すぐに投資に比べて戻ってくるのは考えにくいのが率直な宇宙実験をしてみようと思うことですから。データが無い20年ぐらい前だったら、企業の人に対して、NASAでも日本でも宇宙開発団がそのように言ってこれたんですけども、でも実験のデータが出て経験してみるとそう簡単ではない。そういう時に企業の考えている社長がどう考えるかによって違います。企業でも大同特殊鋼の人たちだと、どう考えているかという例えれば地上の研究でも2、3年で利益が上がるもの、5年後、10年後に上がるものというのを考えながら、その一つにおそらくこの大同工業大学が存在するのであり、世の研究が存在するんですよ。その中の流れの中で宇宙ステーションを利用できるのは、10年後ぐらいを考えながら、今何かを先行投資をしておくのもリになってくるんじゃないかと。我々としてはその部分かもしれない。研究所とか大学とか。また、大学の場合は企業のように利益を生み出すという目的以外に人を育てるとか、研究者がポジションを上げていくための論文数を増やすとか、そういう目的があるのでそれに合致するように国際宇宙ステーションを説明しないといけない。いろんなことが関連してくるので、今こう説明していても人によって聞く部分が違ってくるかもしれない。それはここで質問してもらおうはその意味があると思うんですけど。

大事なものは病気にならないようにすること

水野:宇宙飛行士の方は長期滞在をされますよね。そこで、体調を崩したりする方もいると思うんですが、今、体調が悪くて病院に行く、まずは検査から入ります。宇宙ステーションでは検査の設備があるのかということ、地上と同じような検査が宇宙でもできるのかということが伺いたいのですが。

毛利:スペースシャトルの場合はせいぜい2週間なんですね。救急医療に関しては一応クルー全員が身につけている。国際宇宙ステーションだと長期間なので、必ずクルーの中に医学を非常によく知っている医者が入っていること、最低限自分のことは訓練を通してよく知っている。何より大事なものはそういう病気が起きないようにすること。例えば睡眠時間とかはかなりフレックシブルになるように、スペースシャトルに比べるとできていること、絶えず地上と通信があるので必要な時はミッションコントロールセンターにお医者さんがいて、必要に応じて心電図を撮り、テレビに写っている顔を見ながらとか、定期的にスペースシャトルの場合は毎日コマンダーが連絡しなくてはならない。でも宇宙ステーションの場合でも緊急の時はいつでも連絡できるようになっている。地上では我々の基礎データを持っているので、突発的に何かあつ

た時は最終的には緊急機関を利用しないといけないかもしれない。ステーションだとしても、スペースシャトルがすぐ来て連れて帰るわけにはいかない。

ロシアで3人いたうちの2人が険悪なムードになって、早めに終わらせた

今村:シャトル自体にそういう緊急事態はあったんでしょか。

毛利:スペースシャトルはそんなになくて、わずか2週間なので風邪をひいたために、かなりひどい風邪で打ち上げを伸ばしたことはあるけれども、宇宙に行ったらはないなあ。ロシアはミールという宇宙ステーションを持っている。あの時にクルーが3人いたうちの2人が険悪なムードになって、早めに終わらせたということはあるよね。これから問題なのは、今、建設しているでしょ。すごく気をつけてやっているんだけど、何かの拍子に機械で挟まれたとか、あるいは何か当たって宇宙服が破れてしまったりというようなことがあると、それはどうなるかわからない。致命的になるかもしれない。宇宙ステーションでは血液が流れたために点滴が必要になってくる。点滴というのは地上ではポトポトと落ちてくる、重力を利用したものでしょ。それを宇宙ではどうかというと、92年の我々の実験の時にマネキン人形を使って、ハリを刺して宇宙で使える点滴のモーターを開発しました。それはもうできているので宇宙で点滴は大丈夫。

実験装置は45度Cじゃないと取り出せないが宇宙食を食べる時のお湯は75度C

太田:宇宙で危なかったこと、これはすごいな、またパイナートとか、そういう状態になったことはありますか?

毛利:怪我をするとかそういうことはないです。普通の実験装置は全部怪我しないようになっているんだけど、気をつけなくてはならないのは、むしろ日常的なもの。危険なのは温度ひとつとってみても、材料つくる時に加熱して千度ぐらいに上げて取り出す時には45度C以下になっていないと安全ロックが効いている。一方、宇宙食を食べる時のお湯は75度Cでいい。片っ方は実験装置で45度Cじゃないと取り出せないというところを、お湯が75度Cまで出るんで。それは開くと危険ですね。

エイリアンは地上の環境に合わない

福井:宇宙は24時間あるんですか。あと、ミールが細菌を発見したようで、宇宙ステーションで細菌を地球に持ってきてしまうことはあるんですか。

澤岡学長 毛利氏 今村氏 山本氏 太田氏 坂井氏 森田氏



毛利：あくまでも我々の体は地上における太陽が一回上がって沈むというのをとっているから、それは宇宙に行ってもそれをキープしてる。24時間であつてもいいし、場合によって23時間、22時間になる。簡単に縮められる。厳密には24時間です。もう一つの質問、ミールは15年ぐらい宇宙にいたので、微生物が繁殖していつのまにか宇宙の放射線に強いようなカビが残ってしまった。それは十分ありうる。それは実際に調べられて、放射線に強いようなものがいそうである。でもその他には無重力とか我々が知らない環境もあるので、それに強いものが15年の間に出てくるわけであつて、それが地上に入ってきているから、可能性としてはあります。しかし、宇宙に寄生して強いものは地上に戻ってくると弱くて死にたえてしまう。逆に彼らからすると地上の環境は大変ですね。

危機管理が宇宙訓練、日本が一番ありそうなことを何度も行うのが訓練

森：NASAの訓練で、ちょっと違ったんじゃないかなということはありませんか。

毛利：予想外のこんな訓練もあつたとかでしょうか。基本的には何が起きても大丈夫のような訓練、どうやって対応していったらいいかという訓練が行われているんです。考えられること、すべてに対処してこうというのがNASAの基本的な危機管理です。日本では一番ありそうなことを何度も何度も行うのが訓練でしょ。そうじゃなくてありそうなことはNASAでは当たり前だから、自分でやって下さいって。そんなことを習得するのはプロとして当たり前で、ありそうもないことに馴れていくのがプロの宇宙飛行士だということ発想なので。日本のロケットを打ち上げる時もノミナルというのがあり、これはロケットが順調にすべて動くことと止まりますよというのがノミナルの流れなんですけど、ロケットの打ち上げのまわりの人はたくさんやっているけれど、その他のことはあまり起きないと仮定してやっている。日本の社会というのはすごく優秀だからシラミつぶしにノミナルの部分のパラメーターを細かく考えてやっていくというのがほとんどだけど、でもNASAの考え方はそれはもう考え尽くしている。でもそれ以外に何かあつ

た時に対応できるように、特に最終的には人間の命にかかっているから、それがスペースシャトルあるいは宇宙ステーションの考え方です。日本では人間の命がかかっていないでしょ。日本のロケットは全部無人でやっているから。大丈夫なのを何度も何度もするのが訓練だと。それが大きな違いかな。

宇宙では肩コリはない

新藤：実験室で首の筋肉のこともやっているんですが、地球に戻って来た時の影響は。

毛利：首の筋肉は目の動きとか耳とか調べる前に重要だよ。地上では首というのはすごく重くて、重力に逆らって支えなければいけないので、ここの筋肉は重要なんだけど宇宙では必ずしもそうではないという感覚があつたのは肩コリが宇宙では全然無かつた(笑)。当たり前かもしれないね、首を支える必要がないから、全部弛緩してコルということがないんじゃないかな。最初の3日間は地上と同じだろうということで姿勢も、コンピュータでキーボードをたたく時に地上と同じような姿勢だとすごく力がいって足も踏ん張っていないといけなから筋肉に力を入れてないといけなんだけど、別にそんなことしなくても倒れるようなことはないんだから。一番安定するところまで行ってやってみる。それで3日後ぐらいは馴れてくる。そうってから全然肩コリはしない。

今村：SFにあるように老人ホームを宇宙にというのは不可能じゃないかもしれませんね。

毛利：老人ホームが一番いい(笑)。いい応用かもしれないね。

ロシアではお金持ちは行ける

太田：よっぽどお金をもった人でないと。

今村：アメリカの人を打ち上げるのに実業家がお金が必要だから25億円を...

毛利：あれは今大問題になっていて、NASAでは国家のお金を使っているし訓練でしか打ち上げないというか、NASAでは160人ぐらいが彼らはプライドを持ってやっているんで、あんな簡単に行ってもらっては困る。初めからお客さんとして行くなればそれにいいけど、いきなりやってきて、アメリカ側は宇宙に行く人を厳しく制限しているのに、ロシアではお金で行けるといことになると、かなり緊張感がありますが、最終的には許すみたいです。あの人をずっと調べていたらパイロットだし、かなり訓練しているというのがわかつたので、まあロシアのやることだからいいだろうとなつたようです。

私もジェット機のパイロット

太田：毛利さんはジェット機の操縦をしますか。

毛利：前のスペシャリストの時は乗せてもらっただけだけどミッションスペシャリスト、中の宇宙飛行士は全員操縦できないといけなないので、そのために年間100時間以上、義務的に操縦を習って合格しないといけなないんで。

今村：一人でですか。

毛利：いや必ず二人で。二人乗りで前の席はプロのパイロット。我々の場合は後ろの席で、操縦を習うので、前にインストラクターがいて、ミッションスペシャリストになった後、今度一年間は基礎から操縦の仕方を習います。

山本：ジェット機による訓練の際は定まった経路をとるのか、それとも訓練だから突発的な事が起きるようなことを考えながらするのか。

毛利：二つあつて一つは自由に練習できる領域がメキシコ湾にあつてそこまで飛んでいって自由に練習できる。経路はあらかじめアメリカ全土の規格があつて、飛行機以外はどう飛行するか行き先を提出しないといけなない。

太田：離陸と着陸をやられる。

毛利：それはアメリカの法律の規定でできないことになっています。高さが500フィート以下は操縦していけなない。離陸の時と着陸の時、500フィートまで見ていて、あとはスティックを任せる。それは旅客機も同じ。最後の着陸は機長がしないといけなない。

司会：そろそろ時間になってしまいました。有難うございました。



進藤さん 水野さん 新井さん 森さん 福井さん 石原さん 田仲さん

大同学園創立60周年 大同大学 新学科開設 新キャンパス完成記念 コンセプト・コンクール「金賞作品」

大同学園創立60周年 大同工業大学新学科開設 新キャンパス完成記念コンセプト・コンクール「シャトル」
昨年10月から1月末日までに応募のあった60作品について、3月3日に審査会が行われ、表彰式は3月23日、
本館14階 交流室・ラウンジで入賞者17名が澤岡学長から表彰を受けました。特に優秀な作品である「金賞」を
受賞した作品について紹介します。

テキスト部門表彰者



一般の部

金賞:「Shuttleとしてのケータイ」	小林 政晴
銀賞:学校の開放性とその機能について 「カレッジシャトルの提案」	青木 航 田中 秀和
銅賞:I am active BAKA 心の綾取り シャトル『心のコミュニケーション』	小川 幹雄 神谷平一郎 間崎 利子
努力賞:『シャトル』世界史学習における 効果的指導法の展開	永田 義忠
中学生・高校生の部	
金賞:夢織り人になって	中田 勇人

テキスト部門(一般)金賞

「Shuttleとしてのケータイ」

96C 小林 政晴

あるとき私は、なんてことのないツーツの人であった。職業とは、人生とは、そして私とは?まあ、世間一般的ツーツに考えたりするが日常の諸々の雑事に追われ、徒然なるままに日暮らし硯に向かう心の余裕もなかった。かといって何をやる訳でもない、それが現代流なのである。たとえば人間。たとえばニッポン。

ここ数年のケータイ文化の出現、爆発的増殖をひも解いてみれば何とはなしに現代ニッポンが分かってきそうである。この一言で表すなら、「ケータイは人間を電化製品化した。」

1. 居場所と相手の確認作業が不要になる。かつては、目的とする相手が今ごろはどこで何をしているのかと、あれこれ所在に思いを巡らせダイヤルを回し、電話口にてた人には事情を説明する必要があった。まず自分の身分を明らかにし、相手と呼んでもらうにも「どのような用件?」などといらぬ詮索をされたりときには、門前払いを食ったり、

親という関所の検閲があった。また、外出先からの連絡などは一方通行となり、これまた大変であった。

しかし、ケータイ時代の現在、いかなるときでもどんな場所からでも、節操のないくらい確実に相手をつかまえられる。その際、めんどろな手続き一切不要。なぜなら、かつての回線の電話が一般公開の通信手段なら、こちらケータイは内輪の通信手段となり、自分がかけようとした人間以外がでることはないからだ。受ける側も発信番号が通知されるため、平然と居留守が使えるようになった。

2. 話すところが仮想空間のプライベート領域。

かつては、「家」が「癒え」であった。落ち着いて会話をするのは、公衆電話でも会社の電話でもなく、家の回線電話であった。自分の家・部屋はこの上ないプライベートの空間であるし、相手が親しい人ならなおのこと、ゆったりと会話を楽しむことができる。

しかし、ケータイ時代の現在、会話の内容云々によらず、つながればそこが即、プライベートな領域となってしまうようだ。たとえば静寂の図書館、そう騒々しくはない店内などで突然、例の電子音が流れだす。と、人々はなにや懐をまさぐりだし、一人がおもむろに大声を張り上げる。周囲の人には迷惑だ

ろが当の本人は平然と喋っている。

それは、かつての人々が電話越しにお辞儀をしてしまったように、すぐそこに話し相手がいるよう錯覚してしまい、その声が少々遠いのを距離と勘違いして、つい声が高くなるからだろう。決定的に違うのはかつての電話が家にあり、話し声の主とは向かい合っている感覚なのに対して、こちらケータイでは友達が近くにいる感覚で話している点だ。前者の場合、お互いに電話機を意識させられるものだが、ケータイであると相手も自分も~しながらであるから、とても受話器などは意識しないのである。そもそも「いまだこ?なにしてる?」から始まる会話は、相手の日常すら気にしない、一連の挨拶、確認作業じみてないのだろうか。

3. 人間もケータイも電源ON/OFFの産物

かつては、電話機の登場以来、相手があたかもすぐそこにいるように錯覚させ、即座の虚構の空間を提供してくれていた。電話に向かって会釈というのも錯覚からである。

しかし、ケータイ時代の現在、さらに発展し、いつでも本人につながる利便性から相手の生活は鑑みられなくなり、いつてみれば「お手軽なもの」になっている傾向があるようだ。たとえ向こう側で頭を掻いていようと、声色だけではこちらには分かりようがない。

安部公房の随筆中に、「ヘビ、長すぎる」とはなんともウィットに富んだ文句ではないか」とあったのを思い出した。普通ヘビといえばヌルヌルだ気色悪いだとくるはずなのに、なぜか長さに着目するのが面白いと。氏の説明では、ヘビは幽霊と同様、突然現れ忽然と消えてゆくのが恐れられる原因だという。ではなぜそれが怖いのか？日常性が想像できないから。人間、何を考えているのかわからない人ほど得体の知れない恐怖を感じさせるものだ。

ケータイを使う人の相関図は、ちょうど双方向のTVドラマのようではないか。スイッチONで姿を表し、OFFで消えるだけでなく、お互いが視聴者であり、登場人物なのである。無論登場の前後はすっかり忘れていたか、電話での印象そのままの生活を想像してしまうだろう。

4. ケータイとはいわばアイデンティティ

引越してもIDナンバーは不要。ナンバーが変わればそれまでの人間関係もリセット。ケータイとはいわばアイデンティティ。

かつて、引越しとは清算を意味していた。住みかが変わるのは、住環境の変化より物理的な距離からのストレスが多い。区画整理が立ち退きかと問われれば、お分かりだろう。小学生の転校は、彼にとって人生のリセットと考えてもよいかも知れない。大人にとっても損失は大きい。

しかしケータイ時代の現代、そもそも住所の概念は希薄になりつつあるようだ。ケータイに家は関係ないと述べたように、住んでいる場所もまた重要ではない。このように、家=電話=相手の図式はすでに崩れ、ケータイ=匿名性を帯びたヒト(相手)の結びつきが益々強くなっている。

引越しをしてもケータイのIDナンバーは不変である。反面、このIDが変われば人間関係も全てリセットとなってしまう。我を持たない現代人にとって、ケータイこそがなくってはならないアイデンティティなのである。

5. あるときケータイが私になった

あるとき私は、人民、領土を支配する者であった。いかなる力にも屈せず、全てが思うままに動き、太陽までもが私のために回っているかのようであった。上に立って、気ままに過ごす喜びがあった。しかし、ふと、周りにいる者は私の顔色をうかがい、権力に頭を下げているにすぎず、友と呼べる人のいない悲しみを知った。

あるとき私は、山、海、空の恵みを収穫する者であった。周りの人たちと助け合い、自然と対峙しつつ、ともに生きるささやかな喜びがあった。しかし、ふと、自然のために生死をさまよい、自然の過酷さの悲しみを知った。

あるとき私は、自然科学を追及する者であった。大自然の法則性を導き、自らの手で真理を解き明かしてゆく喜びがあった。しかし、ふと、それらの根底にある、数式だけではとらえきれない、偉大なものの存在を知り、人間の浅はかさの悲しみを知った。

あるとき私は、人知を越えた絶対なる存在を見極めんとする者であった。人間の悪を打ち消すために敬虔な毎日を送り、少しでも自分を高めそれらに近づこうと、精進する喜びがあった。しかし、ふと、人間らしさを否定したため、自分自身の行き方のない悲しみを知った。

あるとき私は、クニのため、家族のために戦う者であった。毎日が生と死と繰り返してあり、確かに自分は生きているという充実の

喜びがあった。しかし、ふと、自分の命の代わりに、人の命を奪うことの悲しみを知った。

あるとき私は、社会のために人の下に立ち、社会を支える者であった。自分より先人を優先させ、人のために働くことが何よりの報酬であり、喜びであった。しかし、ふと、人様のための努力は、肝心の人様には分かってもらえない悲しみを知った。

あるとき私は、人を教え、導く者であった。白紙のキャンパスに自らの知恵の鉛筆で正しく高き道を描き、方向性を指し示す喜びは何者にも替え難かった。しかし、ふと、自分自身の絵を完成させ巣立っていった人には、もう必要とされなくなり、次第に忘れ去られてゆく悲しみを知るようになった。

あるとき私は、なにより美なるものを理想とし、それを至上と唱える者であった。毎日が美しいモノ、美しい人、美しい音楽に彩られ、宝石のようにまばゆい人生であった。しかし、年老いていく自分の姿を目にするにつけ、永遠ではない人間の悲しみを噛みしめた。

そして、あるとき私は、考える人であった。必要は発明の母であり、今日の科学技術を駆使し、世間に役立てる喜びがある。難病の治療、世界規模の高度情報化、宇宙開発など、人類の叡智である、科学技術に託されている分野が数多くある。しかし、また、人々を悲しませる恐れもある。戦争、飢餓、環境破壊、生命倫理などの問題も科学技術の側面として浮かび上がっている。

いま、私にできること、それは私自身を知ること。なぜなら私は生まれ変わり、死に変わり、人類の内に無限の可能性を見出したから。

テキスト部門(中学生・高校生) 金賞

夢織り人になって

名東高校3年 中田 勇人

我が家には、毎年春になると繰り広げられる光景がある。

「ああ、こないたくさん採るんじゃなかった。毎年おなじみのこの台詞が指先を真っ黒にしながら、一本一本でいねいに土筆の袴取りをしている母の口から溜め息と供に零れてくる。父も私も弟も、最初は聞こえていない振りをしている。しかし、スーパーのビニール袋から溢れ出しそうな程の土筆は、一向に袴取り作業が進んでいない。仕方なく父が最初に手伝い始めるが、四、五本取ったところで一番に脱け出していくのも毎

年のことである。私といえば、いつの間にか紛れ込んでいた小さなてんとう虫と遊び始めた弟を相手に、「袴なんて取らず卵とじにしてみたら。」なんてことを言いながら、心の中では、母親という者は、なんでこうも土筆や蜆といった只で取り放題の物は妥当な分量という事を考えずに、やたら採ってしまうのだろう…。などと考えながら、一応は手伝ってみる。

私達家族は、豊かな濃尾平野と清流木曾川に恵まれたこの街で暮らしている。幼い頃から、自然の移り変わりを、土筆や蜆を採ったり釣りをしたりして楽しんでる両親の側で泥んこになって遊びながら感じてきた。そんな家族と供に育ってきた私は、今間で一度も寂しい一人ぼっちの時間を過ごしたことはなかった。経済的には裕福とは言え

ないが、家族の愛情に包まれ、毎年、毎年、春をこんな形で迎えることができた。そして、それが当たり前のことだと思っていた。そんな私達家族に、ある日突然一本の電話がかかってきたのだ。「M子、一人で寂しい。」今にも泣き出しそうな声の小さな女の子からの電話であった。今から四年前の春の夜、私達が1日の団欒を終えようとしていた時であった。

フィリピンは国民総生産の二割強が、海外出稼ぎ者からの送金だと言われている。合法的な出稼ぎ者の数は、三百万人以上にもなり世界中の国々へ散っている。日本でもバブル経済が崩壊してしまった今日でも多くのフィリピン人労働者の姿を目にすることができる。私達家族が出会ったM子ちゃんという少女のお母さんも、そんな出稼ぎ者

の一人として来日していたのであった。寂しくてどうしようもなく、子ども会の名簿を見て初めて我が家へ電話をかけてきた彼女のことは、母がそれまで二、三度見かけたことがあっただけで、彼女がお母さんと二人暮らしをしていることや小学生になった春からは、お母さんが勤めに出ている夜の間、ずっと一人ぼっちで過ごし、そして眠りにつくのだということを知らなかった。核家族が多くなった今、様々な事情で、孤独な時間を過ごさねばならない小さな子ども達が増えている。しかし、現実とその寂しそうな声を聞いた時、私達は何をしてやれるのだろうか。その夜は、私達家族は布団の中に入っても一人一人が心の中で考えることがあり、なかなか眠れなかった。

二 一年は、IT革命という言葉で始まった。そして、また「ボランティア国際年」でもある。私達は、環境保全や災害援護活動、異文化の受け入れといった行政の力だけではできない様々なことも発達した情報技術と一人ひとりの温かな心でネットワークと作るならば、M子ちゃんのような寂しい子どもを一人でもなくし住みやすい社会をつくることのできるのではないかと。

このことをきっかけに、私達は身近なところから少しずつ、世界の現状に目を向けるようになった。そしてM子ちゃんの寂しさを少しでもやわらげてやる方法を家族で考えてみることにした。もちろん彼女のお母さんの心の負担にならないように。私達の暮らしている社会は、特にアジアやブラジル、ペルーなどの国から来ている外国人に対しては、異文化を受け入れ基盤が十分にできていないと感じた。

彼女からの電話は、様々な現状を見つめるきっかけにもなり、そして私の進路を決めさせる機会にもなった。留学生が多い今の高校を選んだのも、もっと様々な国の人や世界を知りたいと思ったからだ。卒業を目前にして、この三年間で、たくさんの世界中の友達ができ、彼らとは、今もインターネットを使えば、瞬時に交流ができる。ベルリンの壁の崩壊により生活が一変したドイツの友。アメリカへ移民した両親と供に医者を目指しているベトナム人の友。平凡な一高校生の私が体験できないような事も彼らを通して学ぶことができた。また、私自身も自分の目で中国やアメリカを見ることができた。中国では活気に満ちた国づくりと、希望に輝いたエリート学生達の陰れるように、「一人っ子政策」からこぼれてしまった。「やみっ子」といわれる子ども達が物乞いをして生活している現実も見えてきた。ホームステイをしたカリフォルニア州サクラメントでは、アメリカではめずらしい、単身赴任をしているホストファーザーから、家庭の果たす役割について教えられた。彼は、高校生の私をとても大切にしてくれた。仕事で家を空ける時も決して私が一人きりにならないよう、様々な工夫と彼の友達を総動員しての楽しい環境を与えてくれた。家族が離れていても交流を深め家庭を楽しく維持していく方法は、たくさんあることを知った。あの時のM子ちゃんに私達家族も、もっともって何かしてやれることがあったのではないかと思った。

こうして、語学を習得することと供に、世界中の友達やホストファミリーから学んだことを生かせるような仕事を将来しなければならぬと思うようになった。その根底には、

M子ちゃんのように現代社会のひずみの中に取り残された子ども達に「何か」を与えられる人間に成長したいという思いがあった。寂しそうな彼女の声をいつまでも忘れてはならないと思った。

二十一世紀が始まった。小学四年生になったM子ちゃんは、すっかりあの日のことを忘れてしまったような明るく元気な女の子に成長した。その笑顔は、私達家族に一足早く、春をもたらしてくれる。彼女を一人残して勤めに出ることに心を痛めていた彼女のお母さんも今は、小さな雑貨屋さんを始めた。めずらしいフィリピンの食品やカラフルな小物がいっぱい並んだ明るい店内は、にぎやかなタガログ語が飛び交い、私達もつい、食べられない豚の耳などを買ってしまふ。台所では、恐る恐る母が豚の耳と格闘している。果たしてどんな料理になるのだろうか。

大学受験を控えた私の勉強部屋の窓の外には、小さな織物工場が見える。「ガッシャン、ガッシャン」という音と供に小さなシャトルが動いて、この街の特産品である美しい織物ができ上がる。この音を聞きながら毎日勉強した。色々なことを考えた。二

六年には、アメリカ、ロシア、日本、カナダ、欧州十五カ国による国際宇宙ステーションISSが完成するという。私達の二十一世紀は発達した科学が驚く程便利な社会を提供してくれるだろう。その中において、私自身は、人種や貧富の差を越えた心を通わせることができる人間になりたいと思う。

さあ、今日から私の小さなシャトルも始動開始!二十一世紀という新しい世界で、自分の夢を織り続けるために。

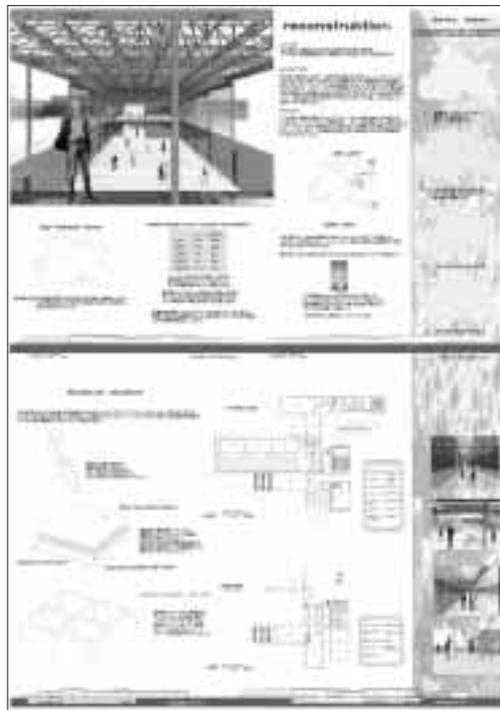
ビジュアルサウンド部門表彰者

一般の部

金 賞:reconstruction	佐々木健二
銀 賞:閉じられた川の開放	牛田 葉子
モノ コト	清水さやか
セツパンサリのある村づくり	松井日登美
銅 賞:自然と人を結ぶ公民館	小磯 美和
Synergy effect - 相乗効果 -	
	見尾谷裕美・清水さやか
努力賞:我が家のシャトル	高柳 良一
「E...」	東川 沙織

中学生・高校生の部

金 賞:組曲 ART OF STAR	井口 慎也
--------------------	-------



金賞、97 A 佐々木健二さんの作品「reconstruction」▶



平成13年度入学式は、4月4日(水)石井記念体育館において、新入生、父母、教職員、来賓の列席のもと厳粛に挙行されました。

新入生は、学部生926名(フレックス920名、社会人6名)、大学院修士課程36名、委託生・研究生・科目履修生13名の975名が入学しました。

平成13年度入学式・学長告辞

大同工業大学へ入学された諸君、入学おめでとう。

同時にご父母をはじめとする、入学生を育ててこられた皆様からのお祝いを申し上げます。この良き日を迎えることができましたのは、本人の努力はもちろんのこと、関係の皆様のご苦勞に対して、改めて敬意を表する次第です。

皆さんは大同工業大学がどんな大学であるか知っていますか。本学は62年の歴史を有する大学です。学生諸君は福沢諭吉を知っていますか。日本に民主主義の考えを導入し、慶応義塾を創設された方です。その福沢諭吉の娘と結婚されて、近代産業を興された方が福沢桃介です。福沢桃助は大同電力株式会社を設立し、木曾川にダムを築き発電所を建設しました。発電された電力を利用するために中部圏に数々の産業が興されました。それが現在の中部電力、名古屋鉄道、大同特殊鋼などへと発展しました。福沢桃介はこの事業を通じて工学が産業の糧として必要なことを痛感し、工学教育に多額の私財を投じました。この意志を受けた大同製鋼の下出義雄社長は福沢桃介翁の亡くなった翌年、1939年に大同工業学校を設立しました。これが大同工業大学の始まりです。

学部へ入学の諸君、君たちは現在まで、いかに過ごしてきましたか。今、ここに一同に会した諸君と私たち教職員は、大同工業大学の家族として、これからの苦楽をともにするのです。諸君は私たちにとって大事な仲間です。大同工業大学の基本は、学生の視点に立って教育を行うことです。どのようしたら、君たちのためになるかということ、最優先に私たちは考えています。しかし、学生の視点にたつということは、甘やかせることではありません。時には、君たちのためになると、判断した場合には、厳しくすることにします。今日の午後には数学の試験があります。これから勉強する工学の基礎になる数学を十分にマスターしていない学生が沢山いるはずです。本日の試験の結果、不十分と分かった学生は前期の半年間、数学の基礎の授業を受けなければなりません。頑張ってください。君たちのためです。大同工業大学は卒業が難しい大学の一つと云う人がいます。4年間で卒業できる人は約80%です。最近は高校教育の多様化が急速に進んでおり、大学の授業について行けないため、ストレートで卒業できる学生の割合は下がる傾向にあります。最初の出だしが大切です。君たち一人一人の自覚が大切です。特に、はじめて親元から離れてアパートや下宿住まいになる諸君は、気持ちを強

くもってください。大学生活は勉強ばかりではありません。5月下旬には大学祭があります。秋には庄内川でボートのレガッタがあり、希望者全員が参加することができます。2年連続全国制覇を続けているクラブもあります。クラブ活動に参加する人はエキサイティングな学生生活をおくることでしょ。自分にとって何が好きなのか、何をやりたいのか、何が得意か。これが分かり、得意なことを中心にした生活を始めると毎日が楽しくなりますし、自信がついてくるものです。しかし、自分が本当に何が好きなのかを見つけることは容易ではありません。まず考え、そして思うことを存分にやいなさい。一生懸命やっている、人生は思いもかけない方向に展開するものです。自分の可能性に賭けることです。多くのことを経験することによって変わってゆく自分に驚くはずですよ。

修士課程入学の諸君は自分の道を見つけましたか。これからは専門家の卵としてもっともっと君たちの才能を磨くことです。

委託生のみなさん。すでに企業で現場を経験された君たちは、勉強に専念できる貴重な一年間です。頑張ってください。

大同工業大学は大きく変わろうとしています。大学60周年の記念事業として始まった新キャンパスが昨年12月に完成しました。隣の白水キャンパスに本拠をおく、建築学科と都市環境デザイン学科の諸君には新建物の建設までしばらく待って下さい。移動の不便はありますが、徒歩5分以内です。

1,2年の内はできるだけ、新キャンパスを利用してもらい、3,4年は教員の研究室がある白水校舎で授業が受けられるよう時間割が組まれています。

現在、大同工業大学は人間と社会の繋がりを強く意識した大学に生まれ変わろうとしています。社会が最も必要としている感性豊かなエンジニアを育てる大学に生まれ変わるのです。来年度には情報学部が誕生し、大同工業大学は単科大学から複数学部をもつ大学へと変わります。21世紀にふさわしい大学へと変身するのです。

諸君、待ち遠しいこと、苦しいこと、過ぎてしまえば、時はあっという間に過ぎるものです。4年間の学部生活、さらに大学院入学の諸君はこれからの学生生活を通じて、若い力を思いっきりぶつけて、勉強に、研究に、スポーツに、友人づくりに励み、愉快的な青春時代を過ごすことを心より願っています。

私たち、教職員と在校生は皆さんをこころから歓迎します。

平成 12 年度 学位記授与式



平成 12 年度の学位記授与式は、3 月 22 日(木)午前 10 時半より石井記念体育館において挙行されました。

澤岡学長から「我々はいま、激動の時代に生きている。そのために、企業が君たちに求めているのは、一人二役、三役を期待している。仕事の好き嫌いとは言えない。何でもこなす覚悟が必要。技術は日進月歩で変わり、大学で学んだことはすぐに役に立たなくなる。しかし、考え方の基本は変わらない。恐れることはなにもない。これからの一生は勉強です。」との告示を厳粛に受け止めて、学部の卒業生 620 名、大学院修士課程修了生 51 名、委託生修了生 2 名らは、溢れる希望を抱いて実社会へと巣立ちました。

盛大に卒業パーティー



卒業パーティーは 3 月 22 日(木)午後 1 時、名古屋観光ホテルに 640 余名の参加者のもと、盛大に開催されました。

長谷川文仁実行委員会委員長から「4 月からは新しいスタートを切る事になりました。今後は本学で学んだことを活かし社会で頑張っていきたいと思います。」と力強い挨拶。パーティーは吹奏楽団の演奏のもとで行われ、終了時間の 3 時を越えても卒業生らは、ゼミ仲間、教職員と別れを惜しんでいました。

平成 12 年度 学長賞、三好賞

晴れの受賞、おめでとうございます。3 月 22 日、学位記授与式において表彰されました。

学長賞

成績優秀者

機械工学科	爾見 博法(杜若高校)
	高井 清孝(岐陽高校)
	田橋 和典(北高校)
電気工学科	岡部 貴臣(名城大附高校)
	河村 篤英(犬山南高校)
建設工学科(土木)	浅井 晴美(小坂井高校)
	増田 晃次(豊田南高校)
建設工学科(建築)	嶋田 明玉(西尾高校)
	時澤 加苗(高崎工業高校)
応用電子工学科	五十住 元(木曾川高校)
	遠山 義之(中津高校)

課外活動優秀者

自動車部	河野 大作(緑高校)
	宮脇 英史(福野高校)
	岡森 貴史(名張桔梗丘高校)
建築設計競技会	花井 奏達(岡崎北高校)

大学院修士論文優秀者

機械工学専攻	浅田 英雄	山賀 洋和
電気・電子工学専攻	川井 孝広	佐藤 誓一
建設工学専攻	中西 竜也	山根 宏之

三好賞

機械工学科	久野 祥正(東邦高校)
	武田 進也(岩倉高校)
電気工学科	藤田 大(中村高校)
建設工学科(土木)	鶴鷹 誠(姫路南高校)
建設工学科(建築)	宮田 亮(星林高校)
応用電子工学科	出水 宏治(名南工業高校)

学位取得

おめでとうございます



機械工学科 高藤新三郎助教授

平成 13 年 3 月 24 日付けで岐阜大学から博士(工学)の学位を取得されました。

学位論文「チタン合金の高温疲労強度に及ぼすショットピーニングの影響に関する研究」



新任教員のみなさん

4月1日付けで本学に着任されました。自己紹介をさせていただきます。

電子情報工学科教授

国立 勉 (くにたち つとむ)



プロフィール

最終学歴 名古屋大学大学院
工学研究科 情報工学
修士課程
学 位 博士(工学)
最終前歴 日本電信電話株式会社
SI基盤研究所 主幹研究員
生年月日 昭和25年7月12日
趣 味 テニス、ゴルフほか

一宮市出身です。大学院を出て、NTT(当時電電公社)の横須賀電気通信研究所に配属されて以来、関東方面にいましたが、平成9年6月に岐阜県の財団法人ピアアジアパン(大垣)に出向し、故郷に戻ってきました。また出向終了後は、研究所の窓口役(出張所)としてNTT西日本の名古屋支店にいました。

変わった苗字ですが、関東方面では「国立」という地名があるので、あまり珍しく思われないうです。でもこの地名は、国分寺と立川の間をとっただけなんです。

ソフトウェア工学分野(計算機言語、ソフトウェア開発の効率化、品質向上)を専門としましたが、ITの発展目覚ましい今日この頃では、インターネットやソフトウェアの応用技術など、産業的・社会的インパクトのある方面に関心があります。私も学生の皆さんと勉強していかなければならないと思っています。

お酒はあまりいける方ではありませんが、スポーツは好きです。お誘い下さい。

機械工学科助教授

白石 裕之 (しらいし ひろゆき)



プロフィール

最終学歴 京都大学大学院
(工学研究科機械工学専攻
修士課程)
学 位 博士(工学)
最終前歴 名古屋大学工学研究科
生年月日 1966年10月1日
趣 味 旅行、歴史散策、音楽鑑賞
専門分野 数値流体力学、流体工学、
燃焼工学

住み慣れた地である大阪を離れたのはもう十年近く前の事になりますが、不思議とそれ程の月日が流れた様には感じられないものです。

旧職場で研究・教育に携わる以前、私はメーカーにて超音速輸送機の研究開発に関する国家プロジェクトに参画しておりました。私個人の経験からではありますが、大学で学び、又は教えて頂いた事が実社会でそのまま素直に役立つ事はそれ程多くはなく、事に当たった本人がうまく現状にて適合させる必要を常に有するもであります。その事からも、社会に役立つ人材を育成する機関としての大学としては、如何に応用へ向けた考えを養って貰うかという事が今後益々重要になって来るのではないかと考えております。学術知識ももちろん大切ですが、学生の皆さんにも考える姿勢を持って貰える様な機会を、教育の場の中で極力多く作れたら良いと考えております。

教職課程助教授

田中 裕巳 (たなか ひろみ)



プロフィール

出身大学 名古屋大学大学院
(教育学研究科博士課程)
学 位 文学修士
最終前歴 名古屋大学教育学部附属
中・高等学校
生年月日 1942年6月20日
趣 味 パトミントン、スキー、麻雀
(いずれもあまりチャンスがありません)

オーバードクターの状況に耐えられず、中・高の現場に飛び込み28年が過ぎました。今回教職課程の一員に加えていただき、現場の体験に踏まえた講義や教育実習の担当をできることを、心から感謝しております。

この2年間、非常勤で「道徳教育の研究」を担当させていただきました。DITの学生(講義で出会った方たちだけですが)たちは真面目だけれど、少し視野が狭いかなと思いました。MITは「社会性のある科学者・技術者」の養成をめざしていると思います。わたしも微力ではありますが、教職を志す学生たちに、教科指導の実力を高めることだけでなく、教師仲間の一員として、そして「学校」の在り方を問い続ける自覚や志操を高めるために、いかに社会的視野が重要であるかを挑発していきたいと考えています。

教職をめざす学生たちが気楽に相談に来れるような研究室を準備したいと思っています。

退任教員からのメッセージ

3月31日付で4名の先生が退任されました。退任された先生方から寄稿して頂きました。



機械工学科教授
山内 五郎

2年4ヶ月という大変短い期間でしたが、大同工業大学では機械工学科の皆様をはじめ

多くの教員職員の方々に暖かく受け入れいただき心より感謝しています。私はもともと愛知県常滑市で生まれ育ち、電電公社(現NTT)に入社後は主として関東地域で過ごし、愛知県と関東をほぼ四半世紀ずつ過ごしたことになり、本学に就職させていただいたときは、随所で聞こえてくる名古屋弁なりに大変な親近感を覚えました。

内側から学内を見ると、教員、職員のレベルも高く伝統と格式と重んずる正統派の大学で



あるという認識を新たにしましたが、同時にそれが偏差値というパラメータに反映されず、受験界からの高い評価につながっていないことを残念に思いました。しかし、現在、澤岡学長のリーダーシップや学園本部の支援により、高校生にとってより魅力的な大学に変貌しつつあります。大同工業大学の真価が高校生や就職先企業に今以上に評価され、大同学園創業当時の高い名声が復活するのを願ってやみません。



応用電子工学科
教授
草加 勝司

日は浅くも、私自身にとれば企業の研究所から学園に赴任し、2つの一見異なった世界を経験させて頂き、刺激的かつ有意義な学園生活を享受してきました。もとより私大は企業のジャンル、本質的に変わるものではありませんが、教育者という観点に立てば、私のような根っからの材料屋（今後もそのつもりですが）にとれば、学術研究以上に教育が重要であることを改めて認識致しました。私も学生時代、教育原理や教育心理などを勉強し、その実践に興味をもったことがあります。それを教育の現場で体験できたことは驚きであり、当時としては予期せぬ出来事であった訳です。

さて学生諸君にとって大学生活は人格形成の1つの要、精神的にも依存型から独立型への正しく転換期であり、事故の進むべき途をしっかりと見定め、それをフオ-カスとした実学を身につける必要があります。教員はその助っ人であり、よき指導者であるべきで、昨今の目まぐるしく進展する技術や経済環境に単に追従するだけでなく、それを教育の現場に反映する責任者であること痛感しました。

そういう私自身も赴任当時は五里霧中、それでも学科主任、就職担当から科研費関係に至るまで1通り学事を経験させて頂きましたが、これも教職員を始めとする皆様のご教示の賜物と感謝しております。大同学園も片鱗を重ねること60年余、還暦を過ぎ、1つの転換期にあります。新キャンパスはその象徴ですが中身も大切、教育の場としての体質改善も着々と進みつつあります。勿論、将来を託す学生諸君を育てる以上、時代の先取り研究も不可欠であることは云うまでもありません。パイオ、ITから始まり宇宙開発に至るまで。ひょっとしたら、地球の寿命も皆さんのニュー-テクノロジー

- によって決まるかも知れません。こうした新生・大同工大で勉強し、活躍する皆さんはラッキー、やがて諸君の血となり肉となって21世紀を担う原動力となることを期待して止みません。

確かに諸君にとって座学はきつい、試験もいやだ……かも知れませんが、現実の社会は厳しい試験の連続、精神修養のつもりで頑張りましょう。人生は一度だけ、やり直しは効きません!

最後に、日頃、叱咤激励を頂いている教職員並びに学生諸兄弟の方々に深謝し、併せて皆様のご健勝と一層のご活躍をお祈り致します。



応用電子工学科
教授
和田 隆夫

本学で7年間、大変お世話になりました。振り返って3つの面で少々感じましたことを述べさせていただきます。

(1) 環境面、今から考えますと、私にとってこの7年間は国立大在任期の35年間と比較するといろいろな面で自由が多かったように思います。平たく言いますとおおらかで個人の意志を貫くことができたところです。

(2) 教育面、現在の学生に最も影響を与えるベストのものは、1対1の対話かと思います。学生は30年先の日本を背負っていく若者です。誰が30年先を予測できるでしょう。如何に生きるべきかを、謙虚に一緒に考えてやるのが我々の使命であるように思います。時には全く徒労に終わることもあるし、成功することもあります。教育には、ロスが付きものと考えられます。

(3) 研究面、全く夜の仕事です。土、日曜日、深夜のみが能率の上がる時間帯でした。現在の一般の会社では、グローバルな競争のまった中に入ります。殆んど人は残業、ウィークエンドに働いています。それでも、リストラ、倒産が生じるわけです。

このような状況下で、良好な待遇をうけて好きなことに没頭できたのは、教員として誠に“幸せ”なことでした。厚くお礼申し上げます。私にとっては、生涯忘れることができない7年間でした。

末筆ですが、本学の教職員皆様方の御健康を祈りますと共に本学の限らない御発展を念願致しましてメッセージとさせていただきます。



教職課程講師
鬼頭 尚夫

人間は育つ環境が異なると、随分考え方も変わるものである、と気付いたのは大学へ入学した頃のことであった。私達の学科(クラス)は40名程度の少人数学科であったのですが、普通科、職業科、大検合格者、さては白線浪人など色とりどりでした。当然出身校が異なれば同じ普通科であっても教育課程が異なり、職業課程のカリキュラムは約半数の単位数は専門科目で埋められておりその違いは判然としていた。それが高校時代の人格形成に大きな役割を果たしたのか、私達のクラスは皆、各人がそれぞれのカラーを持った集合体であった。当初クラス内には幾つもの会話グループができ、そのグループが成長してゆく過程で他のグループと融合し、大学生後半になると、クラス全体が一個の集合体に纏まり、その集合体の中でそれぞれ各人の持っていた志向・感覚の交流が無意識の中で行われて行き、クラスの交流の場が人間的な成長を育む土壌の役割を果たしていたような状況であった。

こんな経験をした自分にとって諸君達に望みたいことは、人は、それぞれ歩いて来た過去を持っているので、人の能力、適正、興味、関心も千差万別である。お互いの交流の場がなければ素晴らしい能力。適正等も単に素材の集合に終わってしまうのである。そこで大学での研究活動、部活動等の交流の場を活して、自ら何かを学びとり、自分の考えで行動出来る自律性と実践力、そして幅広い視野を養って欲しい。それが正しい人間性を育み、将来君達の生きる力になると思う。その間、辛い事も厳しい事もあるだろうが安易に妥協することなく、自らを励まして頑張るって生きて欲しい。

最後に新キャンパスの建設も関係者各位の御尽力により見事完成いたしました。時代を先取りした新学科も設置され、大同工大の新たな発展が始まるようになっております。大学には厳しい時代ですが、本学には明るい先がさしこんでおります。より一層の発展を心より祈願いたします。

D I T 新世紀へ 豊かな情報化社会の実現に貢献する 文理融合型「情報学部」新設の準備を進めています。 ～来年4月オープンを目指して文部科学省に設置申請中～



私たちは今、21世紀を迎えて本格的な情報化社会への激しい流れの中にいます。世界を覆っているこの情報化の流れの中で、今まで以上に情報機器を使いこなす力、情報を正確にキャッチして的確に判断が下せる力、情報化に伴って生じるさまざまな社会的問題

や個人の生活に関わる問題等を正しく把握し、解決する能力が求められます。

本学は4月19日、文部科学省に対して「情報学部」の設置を申請する書類(第1次)を提出しました。認可されれば1年後の平成14年4月には、本学の二番目の学部として「情報学部」がスタートすることになります。

当面は「情報学科」(入学定員 昼間主147、夜間主40)の1学科のみですが、数年後には学科増を行う計画です。

この学部は、システム設計やインターネット通信など工学系の内容を主に学ぶ学生、コンピュータグラフィックスなどデジタルコンテンツのアート・デザイン系を中心に学ぶ学生、あるいは英文の技術的ド



キュメント力でインターネット時代に活躍しようとする学生など、文系理系の両方が混在し影響しあいながら、全体として調和する新しい世界です。

情報学部は、女子学生が大いにその能力・個性を發揮できる場でもあり、多数の入学が期待できます。

(注)「情報学部」は現在の電子情報工学科(応用電子工学科を平成13年度に名称変更)の改組により設置するものです。(藤田情報学部設置準備委員会委員長)

澤岡学長が 科技・学術審の 委員に (文部科学省)

文部科学省は1月30日、省庁再編で新設された「科学技術・学術審議会」の委員に本学の澤岡学長他29名を発表しました。学術審議会や海洋開発審議会、資源調査会などの六つの審議会を整理統合した。任期は2年。

新刊著書を語る

危機管理と人間力

A5版194ページ
編者: D I T 出版企画
出版社: 丸善株式会社
発行日: 2001.3.25



本学初の出版図書ができあがりました。社会交流センター内のD I T出版企画が編者となって、丸善から本年3月25日発行されました。書名は『危機管理と人間力』です。内容については平成12年度総合科目「危機管理と人間力」をベースに、書籍という媒体による本学からの情報発信の一つの試みです。ちなみに表紙見開きのことばを拾ってみましょう。

「本書は、われわれを取り巻くさまざまなレベルの危機を取り上げ、これから克服してゆかねばならない困難な状況にどのように立ち向かってゆかねばならないか、そのヒントを導き出すための初めての試みです。技術的な視点からの危機管理に関する解説から、いかに危機を乗り越えてきたかという体験、文化や歴史に関わる話など、豊富なテーマを取り上げています。」

「ねばならない」が二回も続いて力みが入っていますが、これも初々しさゆえの意気込みと受け取っていただきたいものです。総合科目とともども、本書の第二弾、第三弾を引き続きご支援願います。D I T 出版企画 代表 服部文彦

ニューポリティクスの政治学

編者: 加来健輔・丸山仁
著者: 渡辺博明
(一般教養・人文社会教室講師) 池
出版社: ミネルヴァ書房
発行日: 2000.10.20



ある若手政治研究者の集まりで、「これまでにないタイプの教科書を自分たちの手で作ろう」という声があがりました。それ

を受けて参加者たちが、それぞれの専門から政治と政治学の最新動向を解説した論考を持ち寄り、この本が生まれました。

私たちの社会では近年、環境保護、少子高齢化への対応、男女平等、情報公開や市民参加といった新たな課題が次々と出てきています。しかし、日本政治の現状を見ると、高度経済成長期に形成された古い仕組みや慣行が、今日的課題への取り組みを妨げているようです。

この本の各章では、他国の事情を紹介したり、日本政治の中にわずかに見られる変化の兆しを読み取ったりしながら、これからの時代にふさわしい政治のあり方を探っていきます。「社会構造や人々の意識が変化した今、政治も変わらなければならない」というのが執筆者たちのメッセージです。

材料と環境フォーラム講演会

地球環境問題とアジア ～ 21世紀の展望～

(財)名古屋都市産業振興公社「材料と環境フォーラム」と社会交流センターとの共催で地球環境問題について、山本良一東京大学教授を迎え、2月27日、B 410講義室において、講演会を開催しました。当日は、地球環境問題に関心がある研究者、技術者をはじめ大学関係者ら90名余の方々の聴講がありました。なお、講演会後の交流会も、本館14階ラウンジで開催され、4月から始まるグリーン法の話題に終始していました。



本学主催の企業説明会

就職指導部恒例となった企業説明会が、2月22日(木)名古屋国際会議場に参加企業170社、引き続いて3月15日(木)・16日(金)学生食堂・学生ホールに参加企業120社によって、2回開催されました。

企業説明会は、学生の進路の選択に指針を与え、企業情報の提供により円滑な就職活動を支援するために開催され、卒業予定学部生および大学院生らが真剣な面持ちで企業情報を収集していました。昨年度もこの説明会参加企業から80%の学生内定者がでています。

企業からの声:おとなしくてやや消極的な感じだが、茶髪の学生のいないのに大変驚いた。

学生からの声:企業の人と直接、説明が聞けて非常に参考になり有意義でした。



国際学術講演会

ドイツにおける地球環境問題と 生産技術に関する研究開発の動向について

本学と学術提携大学であるドイツ・アーヘン工科大学の塑性加工研究所所長 R.Koop 教授が、日本鉄鋼協会の招聘講演で来訪される折に、本学に立ち寄り頂き、3月28日、本学図書館大会議室で、生産技術に関する研究開発者60名余の聴講のもとで開催されました。



大同工業大学新校舎大型版画設置記念 澤岡 泰子展



澤岡学長令夫人であり、木版リトグラフの芸術家として名高い澤岡泰子氏の個展が、3月22日～27日の6日間にわたって丸善・名古屋栄店4階ギャラリーにおいて開催されました。

作品は、木版に油性の溶きずみやソリッドマーカのようなもので絵を描き、普通の木版のように彫刻刀で削ったり、

かなやカッターで削ったりして、普通のリトグラフのように製版。最初の試し刷りの時には、今だにどきどきして前の晩からわくわくして、まるで、焼き物の窯だしの時ように興奮するとのこと。

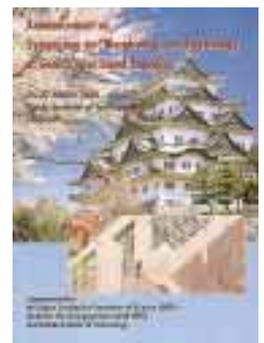
展示された作品の内、12点を本学に寄贈され、本館内に展示されています。



平成12年度 日独科学協力事業セミナー

半規管膨大部の構造と機能

日本学術振興会平成12年度日独科学協力事業セミナーとして「Symposium on "Morphology and physiology of Semicircular Canal Ampulla"」が、3月25日～27日の3日間、本学図書館大会議室において開催されました。当日は、ドイツベルリン自由大学の研究者4名と国内の研究者11名の研究者を集め、過去4年間にわたって推進してきた共同研究成果の纏めとして開催され、50名余の聴講者がありました。最終日の27日には大同機械庭園で、「花見会」も行われました。





「授業開発センター」 設立紹介問答



授業開発センター長
曽我 静 男

質問者 Q: 知り合いの辛辣な学部外者

回答者 A: 就任したばかりの

授業開発センター長

Q: ずいぶんご無沙汰だ。今日は是非聞きたいことがあって、こうしてわざわざやって来た。

A: いやほんとうに久しぶり。何でも聞いてくれ。ただしお手やわらかに。

Q: ではさっそく尋ねるが、「中日新聞(2001年1月26日朝刊)に、あなたのところの大学が学生の学力向上を目指して、授業公開をうたい、「授業開発センター」を作って、授業改善をすることが、何か画期的なことであるかのような記事が出ていた。文部科学省もそんなコメントを寄せていた。我々のような大学外の人間からすれば、教育機関である大学が、学生のために授業改善の努力をするなんて、当たり前すぎて、どこが画期的なのか、少しも分からない。初代授業開発センター長にめでたく就任したらいいあなたに、とにかくそこが聞きたくてやって来た。我々大学外の者にも是非、分かるように説明してもらいたいね。いったいどこが画期的なんだい。

A: ウーン、いきなり痛いところ衝くね。しかも「めでたく就任」なんて相変わらず君の皮肉はキツイね。でもその問いに答える前に言うておかねばならないことがあるんだ。少し大げさになるけれど、歴史的に見て、そもそも大学というところは他の近代的組織に比べれば、変化を厭うという点で最も保守的な組織であった。一つ変えることが大変なところだった。無変化であることそのことが権威(既得権益)を保つことだったのよ。「象牙の塔」とは結局それ以外の何もでもなかった。

たとえば科学の中心地(ヘゲモニー)が17世紀の中葉にイタリアからイギリスへ、18世紀の後半にフランスへ、そして19世紀の半ばにはドイツの大学へと移動し、1930年代にアメリカの高等教育機関へと最終的に移っていったということは科学史や近代大学史の定説だが、その場合、ドイツの大学がナチ支配

下になだれを打つ前に科学研究の中心の座からすべり落ちたのは、当初は革新的だったフンボルトの大学理念の現状不適合がしからしめたものであったのだ。ドイツの大学組織の保守的硬直性が、外部の社会経済の急速な変化に適応できなかったのが一大要因で、結局、科学の中心まで新天地アメリカに奪われてしまったというのが定説だ。そもそもドイツの大学は工業専門学校における工学を1899年の学位授与権付与まで頑として学問と認めなかった、そのわけはつまり……。

Q: ちょっと待て。蘊蓄を傾けているときに話の腰を折って悪いが、私の聞きたい授業改善と、あなたのいう大学のその保守性とどんな関係があるんだい。大学の授業についても、その保守性のゆえに、改善が放置されてきたということをお前は言いたいのか?

A: そのとおり。teaching、つまり教えることについても実情は同じことさ。君も知っているあの偉大なヘーゲル。彼のイェナ大学での最初の講義はまったく人気がなかった。ローゼンクランツの『ヘーゲル伝』(1844)によると聴講者がいなくて講義ができなかった時代があったらしい。シェリングの講義の華々しさに比べて、弁舌の豊かさは持ち合わせていなかったとある。受講生の数が給料に直接響く私講師制度のもとで若きヘーゲルの生活は青息吐息。まあ、私の見るところ、内容が高度でしかも教え方がまずく聴講生にはさっぱり分からなかったのだよ。でもヘーゲルはそんなことに頓着なく世界的偉業を成し遂げた。僻地の小学校教師も経験したウィットゲンシュタインはケンブリッジのカレッジでの彼の授業中に何度も長く沈黙し、自分の哲学世界に沈潜独語し、時には途中で授業を放棄したようだ。うらやましいかぎりだ。もう一つ、アメリカの有名な心理学者のソーンダイクにもこんな逸話がある。この大先生は目前の授業を前にして、「よし次の授業までにまだ5分ある。講義用メモに目を通せば、学生にとって分かりやすい授業ができるだろう。だがその間に相関係数をもうひとつ計算しておこう」とデータ整理を続けたそうさ。大方、ネコかネズミのデータ整理に夢中だったんだろうよ。こんな話は枚挙にいとまがない。先端を切り開く知的営みには、携わっている者にそうさせてしまう不可避の魔力があるんだ。偉大な先人たちは、学びたいやつは勝手に学べと、おおよそそうやってきたのだ。大学もまたそれを許容する社会的地位を保持してきた。君も僕も30年前の学生時代にはそういふふうに使われていただろう。もっともつまらない講義なんてこっちがお断りだったが。

Q: それはそうだが、今、考えてみれば信じられない世界だね。歴史上の高邁な学者先生たちは、自分の研究世界に浸って、足元の授業や受講生など構ってはいられねえ、あるいは頓着しなくてもよかったというわけだ。私のように、大学の外のきびしい経済社会で日々何と

か生業を成り立たせている一大衆からは、足元の自分のお客のことを考えなくてよい世界なんて想像を絶するよ。で、日本ではどうだったんだ。やっぱり同じか。

A: まあ、先端を切り開く学問に直接携わってきたかどうかは歴史的に極めて怪しいが、講義など自分の独善主義でやるのが大学教員だという頑迷な保守の精神だけは、末端までシッカリ受け継いできたと私はみている。だんだんと変わって来てはいるが、そのアナクロニズムは今も健在だ。

Q: その大学がここへ来て、なぜ、やれ学生の視点だ、やれFDだ、授業改善だと、蜂の巣をつついたように騒ぎはじめたんだい? やっぱり巷でいう大学教育の超大衆化と大学生の学力低下や少子化のせいで、大学が慌てて今まで放っておいた学生への教育を見直し始めたというわけか。少子化によって「大学の競争的淘汰」が近々起こる、つまりお客である学生を大事にしない大学は、学生を集められなくて自然淘汰だと新聞紙上を賑わしているけど、あなたの大学もそれでアワ喰って「授業開発センター」など設置し、学生のための授業改善に押し取り刀で駆けつけたというのが真相だろう。

A: 君の言い方には相変わらず悪意がある、がその認識は大筋で間違っていない。むしろここでは詳しく説明できない国立大を含めたこの業界の他の要因がもっと複雑に絡んでいるんだけど、傍観者風に言ってしまうと、戦後日本で初めて、大学がマア、君の言ういくつかの外的要因のせいで市場原理の波に洗われ始めたというわけ。大学も遅ればせながら顧客を気にする近代的組織の一員に加わったということだよ。重要なのは、個々の大学がそうした未知の状況を、どう工夫して抜けていくかということだ。うちの大学は徹底的な教育改革で抜けようと、2年前に全体で決意した。

Q: ここまでのあなたの説明は大目に見てどうか了解できたでしょう。ようやく本題に入るが、それで、こうした情況に抗して、あなたのところの「授業開発センター」というのは一体何をすつもりなんだ。かなり前から、学生たちが教授の授業を評価して、それを公表する大学があちこち出てきていることは、部外者である我々も時々耳にするし、それによって大学は徐々に学生の視点に立ち始めたらしいが。そ



れと似たようなことをお宅も装い新たに始めるというわけかい。

A: 実は現在、大学教育をめぐる試みられている種々の改革の限界はそこにある。今度の「授業開発センター」の存立意義はその限界を突破できるかどうかに関わるんだ。私の見方では、学生の視点に立って授業を改善するという全国の大学の試みは今、壁に突き当たっている。華々しい報道とは裏腹にね。各大学の改革報告書やFDハンドブック(授業改善指南書)あたりに眼を通せば、学生による教員の「授業評価」や個別の教員の実践報告程度が今の大学ができるリミットだってよく分かる。その試みの意義は認めるさ。先に話した大学の保守性に鑑みれば、だ。しかし、そこまでさ。「授業評価」は個々の教員に回収され始末されるか、こうやって授業をよくしようとかいう分析で一卷の終わり。後に残るのはうざりするほど分厚い報告書だ。一体誰が読むというんだ。ところが、大学教育の超大衆化で、日々、「事件は(授業)現場で起きている」のが実態よ。良心的な教員ほど現場で自分の教師アイデンティティの揺らぎを感じているはずだ。

ほんとうは、この行き詰まりの正体は分かる者にはよく分かっているのさ。しかし、どこの大学も知恵はあっても、そのところをシステムとして突破できない。ポイントは「システムとして」という点だ。全体のエネルギーをそこに一旦集中できる組織化なんてどこもやれっこないさ、それに全教員が自分の授業を衆目にさらすという決断もある。他の大学のことはこの際どうでもいいけれど。そんなことをしても失敗するかもしれないと及び腰で言う者もあるよ。端から怖じ気づいているのさ。

Q: オイオイ、これが載るのは「大同キャンパス」という、権威ある礼儀正しき広報パンフと聞いているぞ。みんな読むんだから、もうちょっと品良く言葉を選んだ方があなたのためにも無難だよ。

A: 大きなお世話だ。君の挑発に乗っているふりをしてるだけで、オレのドクゼツはあくまで冷静さ。大体、そんなことを気にする連中はもともと現状を打破する気概も能力もない、反動的な小者だよ。うっちゃっておけばいいんだ。うちの大学にはそんな連中はいないとオレは願望するがね。

Q: 「オレ、オレ」って、品良くしろって、マツタケ! 品性が疑われるぞ。でも、その限界というか、その突破というか、それが今ひとつ分からない。あなたの言い分を聞いていると、大学教育が現在直面しているその限界を「システムとして」突破する試みが、今度の「授業開発センター」だというわけか? 何だか、いきなり大きく出たもんだ。

A: いや、いきなりではない。うちだってこの数年間、決して手をこまねいていたわけではない。「授業評価」は導入して5年になるし、そ



れに基づいた分析報告書もある。実は「授業開発センター」に似た具体案が出たのは6年も前に遡るんだ。紆余曲折があり、今の学長の任期3年目にして今日ここによく日の目を見るんだ。このブランクは大きい、分かる学長がお出ましになったという僥倖を我々は素直に喜ばなければならない。

Q: そんな内輪話は我々にはどうでもいいんだ。聞きたいのは限界を突破するというその意味と、具体的な方法だ。それで学生へのサービスが向上すると言うのかい?

A: あ、申し訳ない、大学に棲息しているといこうした内輪話になってしまう。それを大問題だ、現実そのものだ、と錯覚するんだよ。気をつけてはいるんだが。

今度発足した「授業開発センター」は、一昨年来からのうちの教育改革過程の重要な一環なんだ。夜間主コース改革、教育課程改革、授業改善のためのセンター設置の三つが、教育改革のいわば目玉で、この4月から走り始めたというわけだ。先の二つの徹底性については適任者がしかるべく説明するとして、ねらいは皆同じ。縁あって本学に入学した学生たちと教育面で真剣に向き合おうということよ。あんまり好きではない君の表現を借りれば教育サービスの質的向上。フンボルトの大学からはるか遠くまで我々は来たわけだ。

「授業開発センター」がやるうとして活動はいくつかある。けれど中心になるのは教員の授業をオープンにして、恒常的に授業を参観し合い、授業研究会を催し、たがいに授業方法を学び合うことだ。システムとしてこうした実践を全学的に定着させる。全授業の公開を宣言する「授業憲章」も制定した。すでに話したように今までのFD(授業改善)活動はどこでも、いわば紙の上に留まらざるをえなかった。しかし、我々の「授業開発センター」の活動は、あくまで授業の生々しい現場に密着する。学生と向き合うのは紙の上ではなく、授業現場だという発想だ。センターが目指すのは、現場と我々教員の思考との絶えざる往復運動だよ。

Q: いいよ話が佳境に入ってきた。それで誰の授業を見るんだい。

A: 当然、全教員の授業が対象になる。学内の同僚教員が、授業担当教員の一番自信のある授業を参観させてもらうんだ。最初は週1

回のペースで徐々に軌道に乗せていくつもりだ。2年半ほどで専任教員の授業はほぼ網羅されるだろう。緊張でワクワクするね。その貴重な参観記録や授業研究会経過はそのつどセンター報で学内に発信する。みんな自分の授業のことを考えて読み、学習するだろう。選り抜きの次長、所員、室長も整えた。

Q: そうした試みは全国で初めてなのか?

A: そうさ。小さな有志の単位ではいくつかやられてはいる。しかし、大学が共同意志で非常勤の先生方を含めて全教員の授業を公開対象にするのは初めてだろう。その意味で先例はない。何もかもが試行錯誤だ。大きなエネルギーもいる。しかし我々は現存の学生のために、授業を改善するにはこの方法しかないと考えた。学園も予算面を含めて全面的にサポートすると言っている。まあ、当たり前のことと、それがないと頓挫確実だからね。

Q: 肝心の先生方の抵抗感はなかったの?

A: ないと言えば嘘になる。私だって自分の授業を自信持って同僚に対して公開できるかと問われれば、躊躇するものがある。でもここを突破しないとうちの将来は見えてこない。何よりこの大学に入学した学生をどうするのがいいかを先に考えた。そうした学内のコンセンサスによってセンターを立ち上げた。その意味で、自画自賛ではあるが、この大学の大方の先生方の決断は立派だと思うよ。むろんこの試みは画一化した授業マニュアルを教員に課すことでも、ましてや教員を評価することでもないんだ。それをやったら授業は死ぬからね。教育上、多くの難しい問題を抱えざるを得ない我々教員が、その授業経験を共有化し、批評し合い、共同して何とかいい授業をつくり、その結果、学生たちにこの大学を通過してほんとうによかったと達成感を味わわせること、それを助けることがこのセンターの最終の目標なんだ。こうした企図の重要性をこの先生方は理解し、参加しようというわけだよ。

この記事が公になる頃には、記念すべき第1回の授業参観と研究会が実施されている。ささやかだが、大きな一歩だ。センターは今後、いくつかの困難に遭遇しつつ、終りのない反復的運動体になっていくだろう。

Q: 我々にはまだ少し判然としないところがあるが、それも部外者だからしかたがない。意気込みだけは良く分かるがね。次回の対話を楽しみにしよう。とまかく入れ込みすぎて体をこわさないようにしろよ。それじゃ、健闘を祈っている。

A: まあ、あせらずやってみよ。それにお望みならいつか君も授業参観にご招待できるかもしれないよ。

(註) いうまでもなく、これは今度新たに発足した本学の「授業開発センター」Center for Teaching Improvement(CTI)を広く紹介するための、フィクショナルな対話である。

クリーン
キャンパス
協力しよう
クリーン
キャンパス

キャンパス
カレンダー

5月

20日(日) 大学祭「仮装行列」
25日(金) 大学祭「前夜祭」
26日(土) 大学祭「本祭」(休講日)
27日(日) 大学祭「本祭」
28日(月) 代休講

6月

2日(土) クラブ対抗新人生歓迎
ボーリング大会
20日(水) 前期学生代表者会議

7月

14日(土) 補講期間(休日除く21日まで)
23日(月) 前期定期試験期間
(土日除く8月4日まで)

図書館の開放

本学図書館は、地域社会における文化の向上、発展に寄与することを目的として広く学外、一般社会人に対して、オープンしています。ご利用下さい。

一般社会人(18才以上):

図書3冊(1週間以内)まで貸します。

高校生:施設の利用が出来ます。

問い合わせ/大同工業大学図書館

TEL(052)612-6873

宇宙少年団名古屋支部

「模型飛行機」教室

平成13年度科学技術週間協賛「つくて、飛ばそう:模型飛行機」教室が(社)中部宇宙産業科学技術振興センターの共催で4月14日(土)滝春校舎B棟0401講義室、体育館で開催されました。

親子35組と関係者20名余の中に混じって本学の宇宙少年団リーダーらが、馴れない手付きでゴム動力飛行機を作っている少年らに額に汗を流しながら指導していました。

宇宙少年団の団員らは、体育館で完成した飛行機を飛行させ、自分が想像していた以上に良く飛ぶ飛行機に歓声を上げて満足していました。



人事室

退職 平成13.3.31付

教育職員 和田隆夫(応用電子工学科教授) 鬼頭尚夫(教職課程講師) 山内五郎(機械工学科教授) 草加勝司(応用電子工学科教授)

事務職員 川崎 晃(大学事務局長) 南出正子(大学事務局就職指導室(主査待遇)) 武田淳子(大学事務局白水事務分室(書記待遇))

嘱託職員 橋口紀昭(機械工学科) 永井 勤(工作実験実習室) 吉原勝己(大学事務局就職指導室) 福田 武(大学事務局白水事務分室)

特別嘱託職員 谷口俊春(大学事務局入試室・広報担当北陸地区駐在員)

採用 平成13.4.1付

(注意)新学科等名称変更に係る既設学科については、併任扱い。

教育職員 国立 勉(電子情報工学科教授) 白石裕之(機械工学科助教授) 田中裕巳(教職課程助教授)

嘱託職員 諸川 学(機械工学科及び情報機械システム工学科) 望月孝雄(都市環境デザイン学科) 益永俊則(創造製作センター)

特別嘱託職員 木下 進(大学事務部就職指導室) 鹿野恵策(大学事務部入試室・広報担当愛知尾張地区駐在員)

昇任 平成13.4.1付

教育職員 神保睦子(電気電子工学科教授) 堀内将人(都市環境デザイン学科教授) 萩原伸幸(建築学科助教授) 橋本博美(一般教養外国語教室助教授)

移動 平成13.4.1付

技師 山下 昇一(機械工学科及び情報機械システム工学科技師)

名称変更

変更後	変更前
1 法人本部	法人本部事務局
2 大学事務部	大学事務局
3 情報教育センター 情報教育センター事務局	情報処理センター 情報処理センター事務局
4 創造製作センター	工作実験実習室

組織統合

統合後	統合前
大学事務部学務室	大学事務局総務室
	大学事務局学室
	大同事務分室
	白水事務分室

公開講座のお知らせ

機械製図「図面の見方・読み方」

新入社員・生産管理・購買・営業・事務の方で図面が読めなくて困ったことがある人
講師:情報機械システム工学科 近藤巖助教授
日時:6月7・8・14・15・21・22日

(各週の木・金曜日)18:00~19:30

費用:テキスト代¥2,500

参加資格:卒業生、周辺企業の社員

申込先着40名

申し込み先:社会交流センター

知多市共催公開講座

「快適な住まいを考える」

講師:稲垣卓造建築学科教授、

光田恵建築学科講師

渡邊慎一建築学科講師

日時:6月30日・7月7・14日

(各週の土曜日)13:30~15:00

費用:百円

申し込み先:知多市ふれあいプラザ

(TEL0562-54-1535)

電験3種受験対策講座

電気工学科3年次学生の就職試験対策として

講師:電気電子工学科教員

日時:8月6日~22日(土日、13~15日除く)

費用:テキスト代金 実費)

申し込み先:社会交流センター

作品展

学園創立60周年

コンセプト・コンクール

ビジュアル部門の入賞作品展

期間:6月末日まで

場所:本館2階 学生ホール



編集後記

表紙の写真は4月21日、毛利さんが水野義雄保健体育教室教授、神保睦子電気電子工学科教授及び岩間三郎電気電子工学科教授の研究室を訪問されたときのスナップ写真。今月号は、4月に発行を予定していましたが、大同工業大学創立記念行事の関係で5月発行となりました。

社会交流センター

E-mail:pccir@daido-it.ac.jp

大同工業大学ホームページ

http://www.daido-it.ac.jp/